

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
（毎月一回十五日発行）

（通第六三号）

# 慈光

第六卷 第六號

## 目次

三誓偈講話……………	福島政雄……………	(1)
日いであまさに夜あくるものなり……………	柳瀬留治……………	(6)
亡き妻を懐ふ……………	和才誠司……………	(8)
お粥の念仏……………	聚雷生……………	(14)



先回まで四十八願について聖人が特に心をつけて味つておいでになつてゐる願を拾ひ／＼して、大体私として感じましたことを申しました。然し甚だ不十分であります。次の段に移ります。

これから法蔵菩薩の御修行になるのでありますが、今晚はそこを申し述べて見たいと思ひます。始めに四十八願を説き終られた法蔵菩薩が、三誓偈と云はれてゐる偈文を述べて居られます。この偈文によりまして大經に説かれてゐる道が絶対他力であることがはつきりわかる。昔の講者の方は申してゐられますが、これから偈文に就いて申しませう。

「我超世の願を建つ 必ず無上道に至らん」

超世の願と申しますと、世間普通の願をはるかに超えた願ともうけとられますし、それからまた、この世間を超越する道の世界を願するとも受けとれます。この両方からこの言葉の意味がわかると思ひます。

すつかり一つに融け合つたやうになつて更に異趣なしで、立派な世界に居るといふ考が微塵もない、そこに菩薩の働きが何時の間にか俗世間にしみこんで現れて来る、そこが同じなのであります。

われ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、とは上なき道、これ程高い道は無いところへ上つて行くといふことと衆生の底の底まで下つて行くことが一つになる。上りと下りが一味にとけてゐる、さういふところでありませう。この願が満たされないならば正覺を成ぜじと誓はれてあります。

「我無量劫に於て、大施主と爲りて、

普く諸の貧苦を濟はすば、誓ひて正覺を成ぜじ」

この貧苦とは、貧しく苦しんでゐる人々とは、必ずしも財産上の貧しいことではないでありませう。それは経済上の問題も含めてよいのでありますけれども、矢張り中心問題は心の問題でありませう。貧苦とは心の中心がどうにかうにも足らない、何か足らないものがあつて仕方がないその者を大施主となつて救ひたい、布施の行を徹底したいといふ誓でありませう。

キリストの山上の垂訓に心の貧しきものは幸なりと云つてゐますが、キリストの心の貧しき者といふ意味は、空、無相、無願三昧といふことを佛教で申しますが、我執が去つ

これは前から聞かされもし、考へさせられても居ることです。ありますが、この世の中のこととは、この世の中に没頭してゐるのでは解るものではありません。世間を超出して始めて世間が解ります。然し世間を越えたいといふのも、上に離れてゐるのでは本当ではありません。超出した立場からこの世間にまた歸つて来る、第二十二の願、還相廻向の願のやうに、還相して来るのであります。即ち還相の行といふことを申しますれば、これがあつてこそこの世間が救はれて行くのであります。

唯超絶界から見下して、人間はつまらないと批評してゐるのであれば超世の願ではありません。超出して再び世間にかへることが大切なのであります。聖徳太子が三經義疏で七地以上の菩薩のことを説いてゐられますが、七地以上の菩薩は俗世間からはるかに超越してゐられるやうですがこの菩薩といふものは「衆流に冥合して更に異趣なし」であります。衆流とは煩惱の種々の流れのことです。その中で、

て、心があらゆる教をうけ入れる触光柔軟の者は幸なり、といふ意味でありませう。ここでの貧苦とは自分の心がみだされないので、心が貧しく苦しんでゐる者でありませう。

私自身は心が貧しく苦しんでゐる者であります。物心がつきまして以來、二十六歳に心機が転換しましたが、以後人生に処しまして如何にも心の淋しさを痛切に感ずるやうになりました。常に何物かを求めて居ります、人間に向つても誰かにぶつつかつて見る。それで貧しさ、淋しさが無くなるかといへば、ぶつつかつて次第ではなほ淋しくなる。そこで人生は何と淋しいところだらうといふ淋しさを持ちつづけて今日まで生きて参つて居ります。みださうとしても、みださうとしても、みだされぬものがあります。

最近ギリシヤのプラトンの書を読んでゐます。その饗宴といふ書の対話篇を読みますと有名なエロス、愛と申しますか、そのエロスの本質を比喻して「エロス、愛の神は、富める者を父とし、貧しき者を母として、富と貧しさの間に生れたのがエロスである」と説いて居ります。

人間の愛の心は、非常にゆたかであつて、同時に非常に貧しいものであります。惜しみなく愛は奪ふと有島武郎は云つてゐます、それなら奪はれて満足するかといへば、いつも満たされないものであります。

男女の愛もさうであります。親子の愛情もさうだと思



ひます。満足といふことはなく限りなく子が親に求め、親も亦子に求めてゐる。親も子も世間的には美しい生活をしながら、何処か深いみたまされぬものを持つ。純な親子の間でも、豊かさの半面と貧しさの無限があり、それが一つになつてゐるのであります。ゆたかのやうに感ずる時は前途を見てゐる時であります。結婚いたしましたも二十年、三十年すると無限の淋しさを感じてやうになります。結局「諸の貧苦」にあたるので、ゆたかさうに見えたのは我々のまほろしであつたと知らされるのであります。

イギリスの美術館にチツツの絵があります。ク希望クといふのとク人間の愛クといふのがあります。また他に人生の種々のまほろし、幻覚、さうした絵があります。これは人の前に種々の美しいものがあり、それを掴まうとすると逃げて行く、さうしたものを現して居ります、これをライフスイリユージョン、生活の幻覚と申すのであります。前方に幻を見る時はゆたかでありますが、手に掴まうとすると無限の貧しさを感ずるのであります。これは欲が無限であるところから常に苦しい貧しさをもち続けている、これが我々の現実の姿であります。

斯様に淋しがつたり、苦しんだりしてゐる衆生に、無量劫に何処々々までもまことを施したいといふ願であります。限りないまことを施していつて限りなく苦しめるものであります。天上界とは感覺的享樂の世界であります。人間界は迷ひの世界であり、天人の世界は樂なたのしい世界と思ひますが、感覺的な世界ですから、これをぬけねばなりません、さうでありますから天上も人間も徹底的迷ひの世界であることをしらせたいといふ心持であります。

「神力大光を演べて、普く無際を照らし、三垢冥を消除して、広く衆の厄難を濟はん」  
神通力をもつて、不可思議の力で大なる光を演べとあります。光といふ言葉が經典にいつも出ますが、慈悲と智慧を一語でつくすにいかにもよいと殊に感じて居ります。佛の慈悲と智慧とがひとつにひびく趣がひかりといふ趣であります。この光をのべて限りない土、国土を照し、何処までも、何処までも照しとほし、如何なる人々も、これにめざる世界を作りたい。そして三つのけがれを除き去つて諸々の厄難をすくひ、彼の智慧の眼をひらき、闇をなくし、諸々の惡道を閉し塞いで、まことのよき世界に通ずるやうにしたいといふ心持であります。

「功祚成じ満足して、威曜十方に朗かならん、日月重暉を駈めて、天光も隠れて現ぜざらん」  
功祚とはてがらでありいさほであります。それが満足に成じ遂げられて、威曜、みいづが十方に朗かであるやうに

が、結局は満足をしめられるやうになる、それが成就せぬと成佛はすまいといふ誓であります。

「我佛道を成ずるに至りて名声十方に超えん。」

究竟して開ゆる所なくば誓ひて正覺を成ぜじ」

第三の誓であります。自分の名が十方に聞える様になりたいといふことであります。これは俗世間的に見ると名譽が十方に聞えるやうに、名譽の欲のやうに受け取れますがさうでないやうであります。これは念佛のひびきが十方世界の人々にひびき渡るに違ひない。成佛せられた時、法藏の名が親の名として十方衆生にひびき、稱名が湧き出る、その中に親と子が呼び交ふ声が一つになつた趣がある、さういふ世界をひらきたいといふのがこの御心持であります。

「離欲と深正念と淨慧とをもつて梵行を修し。

無上道を志求して、諸天人の師とならん」

離欲深正念とは欲を離れ、正しい念に住してあります。次にけがれない智慧をもつて、すべての行をきよらかにして行かう。そして無上道を求めて行き、これだけでよいといふ風な限りあるものでなしに、何処までもく求めて行く、そして諸の天人や人間の師となりたいと誓はれて居ります。

即ち天上界や人間世界をみちびくやうになりたいといふなりたい。その光には日月も、其他の光も隠れてしまふといふ風な広大な光でありたいといふことでもあります。

これは心の光でありますから如何なる太陽の光も及ばない、太陽の光はさへぎるものが出て来ますが、心の光は何ものにもさへぎられない、とどめられない、日の光、月の光も及ばない、天の光も皆かくれてしまふのであります。

「衆のため法藏を開き、広く功徳の宝を施し

常に大衆の中に於て、説法獅子吼せん」

衆生のためにみりのの蔵をひらき広く功徳の宝を施したい、即ち功徳といふ宝を施したいそれ自身が宝である、さうしたものを施したい。そして常に大衆の中で獅子吼したいとあります。大衆でありますから一切の人々、群萌と同じ、一般の衆生の中で説法獅子吼しようといふのであります。

「一切の佛を供養して衆の徳本を具足し。

願慧悉く成満して三界の雄となることを得ん」

一切の諸佛を供養して徳本を具足しとありますが、この標本とは念佛の意味であります。念佛を申すといふことになると、法藏菩薩自身が念佛の身となつて、願と智慧がみな十分に満足せられて三界の雄となることを得んとあります。

三界とは欲界・色界・無色界であります。欲界とは我々の住む欲の世界であり、色界とはただすがたかたちはある



が欲がない世界であります。無色界とはすがたかたちにあ  
らはれて見えぬ欲も無い世界であります。金子先生はこれ  
を解り易く次のやうに云つて居られます。欲界とは五欲の  
世界であり、色界とは相形はあるが欲を離れてゐる世界で  
芸術の世界と考へられる、譬へば絵を見る時、この絵が何  
千四何萬四するといふやうなことを忘れてゐる、絵と人と  
がとけて楽しんで居ります。音楽も彫刻もさうであります  
、姿や形を聞き見るのでありますが欲を離れてゐるのであ  
ります。無色界は姿や形を離れてゐるから哲学的思惟が無  
色界ともいへるだらうと説いて居られます、さういふこと  
になるのでありませうと思ひます。

さて佛教では三界は三つとも迷の世界であると教へられ  
てあります、これが佛教の徹底的なところであります。欲  
から離れた芸術的世界、更に哲学的思惟も一層高尚のやう  
であります、これも迷の世界であります。欲界も、美術  
哲学の三界は皆迷ひである、そこをもう一つ抜けねばま  
との道は得られない、これを教へるのが佛教であります。  
さて「三界の雄」でありますから、三界を超越して、三  
つの世界を自分の内にとり入れられて、始めて三界の雄と  
なれるのであります。離れて外にあるのではなく、その欲界  
や、美の世界や、思惟の世界を夫々とり入れて、さまざま  
入れざる力で見もし聞きもし、それを取り入れて身に受け  
入れて行く、これが三界の雄であり、英雄でありませう。

## 日いでてまさに夜あくるものなり

柳 瀬 留 治

大分前の事ですが「一大事因縁」の語を聞き有難く思ひ  
今もさう思つてゐます。

思へば近角常観、常音両先生に御縁を結ばせて頂いたこ  
とです。もう四十二三年の前にもなろうか、先生の念力でつ  
ひに信仰に眼を開かせて頂いたのです。若し先生の御縁が  
なかつたら今頃はどうかた知れませんが、恐らく疾  
くに狂ひ死にしてゐた事であらうと思ひます。

私は一の変質者でせう。心の片輪者であらう。お慈悲に  
氣付かせて頂いても同様な変質者なのです。若い頃から神  
経が弱く生活の現実によつかると誠に意氣地がなく、嫌な  
癖許りで、何と浅間しい仕様のない自分だらうと思ふと急  
に内臓がよぢれた様に痛んで來てけつそりし、下痢した後  
の様にへなへになるのです。その時、俺の生き得る世界は  
唯念佛許りだつたのだと氣が付くのです。その時、一番有難  
いのは、歎異抄の「さればそくばくの業を持ちける身に  
ありけるを助けむとおほしめしたちける本願のかたちけな  
さよ」のお言葉なのです。元來私には罪惡といふは言葉丈

超越して行くが、そのまま還來してゆく、そこに三界の雄  
となるのであります。

「佛の無碍智の如きは、通達して照さざるなし  
願くば我が功慧力、その最勝尊に尊しからん」

佛の無碍智でありますから、何処までも徹つて照さぬと  
ころはない。まことでありますから苦しい世界にもとほる  
のであります。そのやうな佛の無碍智の世界と等しい世界  
を自分の功慧力、いさほある智慧の力でひらきたいとあり  
ます。

「斯の願若し剋果せば、大千應に感動すべし  
虚空の諸の天人、当に珍妙華を雨らすべし」

斯の願の通りに必ずなるならば、三千世界が感動して、  
虚空の天人は妙華をあめふらすでせうと結ばれてあります  
大体、以上が三誓偈のところであります、これは始めに  
ありました歎佛偈、光顔魏々の偈文と共に、常に勤行を申  
しながらよく感じますのは、明朗な世界がひらけてゐるこ  
とであります。大無量壽經は華嚴經を縮約したやうであり  
ます。華嚴經は、明らかなで明るい光がかよい、全体に行き  
わたつてゐます。佛のさとりを写し出されて居りまして徹  
頭徹尾明朗な世界であります。この明朗さがこの両偈文に  
現れて居りまして、何とも云へぬ美しい、あかるい、よい  
感じを與へられます。これは光顔魏々といふ佛陀の御相に  
内在するその世界をひらかれたのがこの三誓偈であります

で、罪惡観とか機の深信と云つたものも口幅たくて言へま  
せん。心は自分を通さうといふ自我一杯で、全く社会や  
人など顧みる余裕がなく、ただ自分のこと丈なのです。そ  
の自分がいい年になつてぐさつと参りへなへになる。何  
といふ事だらう。成程こいつは俺の性分で、死ぬ迄治らな  
い痼疾で、又しても俺を行き詰らせるこれは俺の業なんだ  
と思ふのです。幾程信仰を聞かせて頂いても起る持病なん  
です。それで「そくばくの業を持ちける身」の一言がひし  
くと應へるのです。

人や社会を顧みるところか、お慈悲も念佛も打ち忘れ、  
実は「佛は放つて置け」で、自分で行けるうちは佛に用な  
しで、佛壇あり乍ら拜みもせず、目の前の事を「あゝして  
かうして」と、それを遂げようとする思ひで一杯、それが  
自分の力で遣り通せるものと思ひ、又自分の力で切り抜け  
る外はないと思つてゐる次第です。人の葬儀に列つて念佛  
を唱へても、殆んど空念佛で、恰も人は死ぬべくして死ん  
だ如く、自分もいつかは死ぬと思ふものの、未だ丈夫だか



らと、さきへ押しやつて、自分一人で生きようと思ふ一念の外ない有様です。誠に自己中心で他を容れる余地がなくそれが佛の慈悲をも押し返け、そちらで控へてゐて欲しいと押遣つてゐるのですが、それが何か現実生活の上で困難にぶつかり、切抜けようとして切抜けられず、して見ようのない空虚さとなり、あるものは醜い癖だけ、はては困つた、全く途がない、と思ふ途端に、その力なく空虚な、何とも仕様の無い私に、「佛かねて知らしめして」の一語、「そくばくの業を持ちける身」のお言葉が迷り来つて、なみく／＼とその空虚に、そのへな／＼になつた心に満たされ「あ、唯念佛だつたのだ、空虚なものの駄目なものに、唯稱へさせようとの佛の慈悲の念佛だつたのだ」と、ほつと息を吹きかへさして頂き、遂げられぬまま、失敗のまゝ、それが計らざるお慈悲の一つに満たされて、又遅々と歩み出させて頂くといふ次第です。

一度聞いてわかればお慈悲で貫けさうなものです、誠に腹保ちのない人間で、又しても空虚になるのです。それで常音先生に「腹だもちがなくて困ります。もう少し永く腹應へのあるやうに聞かせて頂けませんか」と申した所、「君は病人だよ。念佛のお粥しか喉を通らぬ病人だよ。それなのに固い歯應へのあるもの、腹だもちのあるものをと夢みてゐる。それで流転輪廻の涯しがないのだ」と教へて

ちらにあるのだ、自分をいぢくつても涯しなく汚いもの、暗いものばかりだ。だから止めよといふんだ。自分を止めてわしの言ふ所を聞け」と。私はびつくりして先生のお顔を仰いだ。真剣なお顔で卓を叩いていつていられた。それは四十年もの前の事であるが、今猶ほ目に見えて来ます。

### 後記

お求めに應じて書いて見ましたが、書くとは煩惱誇りか、罪業誇りのやうになつて、碌な事が書けません。そして題の付け様もありません。兎に角御読みになつて御覧下さい。そして題もお付け下さい。

題は口で申しますと「闇いこちらを照して下さいのは向ふ様の光である」といつた意味なんです、お考への上

## 亡き妻を懐ふ

### 死の豫感と發病

私の妻が昭和十一年四月八日、逝去してから今年は早や十九年になる。今日は丁度その祥月命日に当り、近親者に

下された。先生が晩年「又しくじり又しくじる汝だからお見捨てないお慈悲ではいか」とよく仰言つた。本当に有難い生きたお言葉と思ふんです。それによつてもう駄目だと思つた自分が、又しても生き返らして貰つてゐるのです。でないといふと迎も助かる途のない私です。

こちらは自勝手に自分で行けると思つてゐる時は御用なしで、はねのけてゐますが、「駄目な奴だ、今に駄目になるぞ」と、お見捨てなく待ち受け給ふお心が変らぬ、そのお心が金剛堅固な丈です。こちらは又しても物を取り落すそして空虚になる癖です。だから真信を渡して下さらないのです。いはば光は向ふ様にあり価値が向ふ様にある。それにより暗闇が明るくされ、心が満たされる。それなのに満たされると真信が掴まれたかの如く思つて、向ふ光を仰ぐことをせず、自分の胸に至つた光を覗き込む。胸は依然元の闇黒許り、空虚さ許りなんです。

いつぞや信仰談話会の席で、常観先生が誰かを大声で叱る様に説いて居られた。今は亡きMさんとの押問答だつた様に見える。「君は何しに来てゐるのだ。自分は駄目で仕様がなから聞かうと云つて来たのではないか、信仰を説くのはこちらなんだ。目を挙げてこちらを仰げ、光はこちらなんだ。いつ迄も自分が／＼と己れ許りをいつてゐる。自分を止める。聞くべきはこちらの話だ、救はるべき光はこ

お願い申します。愈々手に負へませんでしたら「回想」でも「変質者」でも結構です。

留治

以上の御書面が添へてありましたので、原文を繰り返し拜読して居りますと、おのづと心に浮びましたのが、口伝抄の三章でありました。即ち「無碍の光曜によりて無明の闇夜はるる事」の章であります。如信上人が覚如上人に親鸞聖人の仰せを口伝せられ「夜あけて後日出づるにあらず日いでてまさに夜あくるものなり云々。他力をもて無明を破するが故に日いでてのち夜あくといふなり」の聖語から表題を頂きました。

聚墨生

### 和才誠司

て心ばかりの御佛事を営ませて貰つた。

妻の病氣は急性肺炎にて、三月三十日の夜急に發熱し手



当てを竭したが、高熱が降らず九日目即ち四月八日に、遂に御浄土に参らせて頂いたのである。病の原因は妻が入浴後洗濯を為し湯醒めの為、その晩俄に発熱したのである。妻が家族の爲洗濯し其結果死んだのであるから、私共家族は実に申訳ない。爾來私の家庭では入浴後の湯醒めに注意し熱い湯でなければ入浴せぬやう心がけてゐる。私共は近角常観先生の御世話で信仰的な結婚をしたのであるから「信仰を主にした生活を営まん」と心がけ、夫婦の間に死ぬると云ふ「話が屢々交された。ところが妻は死ぬる二三月月前から「妻は死ぬる、どうしても永生させぬ」と死ぬることを強調するやうになつたが、私は別に之を気に止めなかつた。「死ぬる人には死の予感がある」と云ふ人がある。眞疑は元より私にはわからぬが、妻にはたしかに死の予感があつた。

急性肺炎の特徴として、高熱と呼吸困難の爲患者の苦痛は烈しかつた。その為か発病後日ならずして妻は「今度の病氣はひどいから私は全快しませぬ」と云ひ出し之を慰むるに困つた。何分熱は高く睡眠は出來ず一寸まどろみても「今御浄土に参つて来た、御阿彌陀様を拜んだ、多くの僧侶が勤行してゐた、御浄土が莊嚴であつた、ありがたい御説法に遇つた、妙なる音楽を聞いた、樂の音が今も尙聞こえてゐるではないか、みんなにはあの音楽は聞えないか、

妻は発病の時から今度は恢復せぬと思ひ込んでゐるから発病後直ちに私に遺言しようとするが私は之を受けなかつた。私共は予て達者な時は互ひに死ぬると云ひあつてゐたのであるが、偕相手が今や頻死の重態に陥り夢現に極樂の樂の音を聞いてゐる際、意志の弱い私は「予てお互ひが死ぬると話しあつてゐたのは今日の事」だと、心には充分意識して胸まではこみあげて来るが、口にはどうしても云へなかつた。実は妻の遺言は私にはよくわかつてゐるのである。私が遺言を受取つたら妻は安心してその儘直ちに御浄土に参るやうな気がした。当時私には信仰よりも全快させたい気持が全身に漲つてゐた。それに就いて私にはこんな経験がある。私が先年重き急性肺炎を煩らひ、医師は匙を投げたが、幸ひ妻の看護に依り全快した。だから私は妻に「私は先年急性肺炎にて両肺全部を犯され医師に見捨てられたが、御前の看護に依り全快したではないか御前の病勢は重態だが、まだ右肺を犯されてゐるばかりで、左肺は健全だから、自分勝手に最悪の場合をきめ込むことは偏見ではないか。私に任せて呉れ、今度は私が介抱する順番だから必ず全快さして見せる。苦しからうが頑張つて呉れ」と懇願した。

予て柔順な妻も私が遺言を受取らぬので、非常に昂奮し「予て私共が人生はあてにならぬと、あれほど迄云つてゐる

妻の葬式が立派すぎた、もつと質素にして貰ひたい」など云ふ。医師から「患者は脳を犯されてゐるから患者と話をせぬやう」注意があつた。妻は熱に浮かされてか、夢現に御浄土の莊嚴を家族や看護婦達によく話すが、其他には平常と少しも變つたことなく、よく落つき医師の注意を素直に守つて療養するから、数日後には医師から「信仰の力の偉大な事を初めて見せて貰つた」と讃められた程である。医師にあらゆる手当てをして貰つたが高い熱は下らず、その為睡眠は採れず、体力気力は衰へ、心臓は衰弱し、医師から「なかなかの重態ではあるが、十日間心臓が熱に耐へ得るならば、恢復は長引くが生命は取り止める」と元氣つけて貰つたが、九日目に遂に斃れたのである。

其後新聞雑誌などにて急性肺炎の新薬新療法の発表ある毎に、若し今日であつたら生命を取止める事が出來たであろうになあと、取り返しのかね愚痴を未だに繰り返してゐる。

### 遺言

妻が「近親者とは御浄土で又すぐ逢へるが娑婆でもう一度逢ひたい」と申し出たから早速妻の指名した人に来て貰つた。妻は病苦の俚にも平常と少しも變りなく悠々と昔話に時を過し、極めてなごやかにそれとなく永遠の御別れを爲し、「これで思ひ残す事はない」と安心した。

たのは、今日ある為ではないか。私の命はなが引いた処で、あと僅一兩日の事である。夫婦の仲で死の瞬間迄姑息な事を云つて眞実を打ち明けぬとは、ほんとにひどいではないか。何を血迷つてゐるか」とその苦衷を訴へた。私の口からこんな事を云ふのは穩ではないが、妻は非常に柔順で同棲二十余年間未だ會つて怒つたことがない。私がどんな無理を云つても、之を素直に受入れるので喧嘩にならないう。私が無理を云ふと、妻は妾が悪いから至らぬからとあやまり、一向問題にしない。こんな優しい妻が臨終に激昇したのであるから、私は此時ほど驚いたことはない。私は妻の病氣の爲に全く逆上してゐたのである。私の爲に妻を御浄土に参らせたくなかつた。眼の先の私の勝手を第一義とし、信仰を第二義にして、臨終の妻を苦しめた。妻としては余命既に幾何もないから、如何にやさしいとは云へ人間である以上昂奮せざるを得ぬのである。私は此警告に依り迷妄の夢醒め、妻にあやまり其の遺言をありがたく受取つた。

元來私は口に信仰を称へるが其の内容は空虚であるに反し、妻は信仰を口にせぬが其の内容が充実してゐる。其の証拠は私は始終怒るが妻は決して怒らぬ。之を相撲に譬ふれば妻は横綱で私は禪かつきである。横綱と禪かつきとの取組であるから相撲にならぬ。私が仕切つても妻が嫌つて、立ちあがぬから全然問題にならぬ。



妻は健康時に頂いた信仰が臨終に光り輝いてゐる。

私は無事の時頂いた信仰が妻の重態に遇つて周章狼狽し、今や妻が御慈悲に満足し將に大往生を遂げんとする際『死ぬる事を云はず、私の為、病苦を頑張り生き延びて呉れ』と迷つてゐる。私の迷妄の為斯の如き迂余曲折があつて殆病第三日目に遺言を受取つた。私への遺言は『妾の問題は御佛様に由つて既に解決さして貰ひ、此度間違ひなく御淨土に参らせて頂くから安心して下さい。唯問題は子供の事だけ、どうか子供の事呉々も頼む』(當時子供は九州大学々生の長男を頭に四男一女で末子は六才であつた)と平常通り静かに語り、私は『子供は私が引請けたからどうか安心して下さい。予て頂いた信仰に間違ひなく病気が進めば進む程、信仰がはつきりして、歎び勇んで御淨土に参らせて頂く事、何たる仕合せであらうか。今に私も後から参らせて貰ふからは御淨土で待つてゐて下さい』と答へた。妻は『これで重荷がおりて本當に安心した。何も思ひ残す事はない』と非常に歎んだ。

子供への遺言は『お母さんは皆といよいよ別れねばならぬが、お淨土でまた遇へる。妾が死んだ後は、能く勉強して善い人になつて下さい。どうぞ御佛様を信じて御淨土に参つて下さい。お母さんはお淨土できつと皆さんを待つて居りますよ』と唯これだけである。此遺言を幾度も繰り返

を患者自身能く意識して、恰も他人の事のやうに之を枕辺の人々に語り、平生のやうに静かに御念佛を称へ、枕頭の人に一人一人御別れの挨拶を為し、子供等には善い人になつて下さい、どうぞ御佛様を拜んで下さいと懇々と繰り返すのである。耳が聞こえなくては、患者だけ唯一人で話し続け、眼が見えなくなつても尚話をやめぬ。呼吸の限り御念佛と子供への訓話を続けながら遂に逝つた。

妻は人中で大きな声で話しかねる様な弱い女であつたが母として最後の瞬間迄子供の為、勇敢に闘ひぬいた極めて強い母であつた。既に耳は聞こえず眼は見えなくなつてもなほ子供の為闘ふ事の出来たのは、実に信仰の賜である。妻があれば頼んだ子供を此十九ヶ年の間に、戦争や疾病の為三人を失ひ、又残つてゐる子供に対しても、親の責任を果して居らぬ現状を顧み、故人に対し洵に相済まぬ。

### 妻の生涯

終戦を界として世の様が變つた。特に女性が著しく變つた。此際徒に過去を追憶する事は愚の骨頂であるが、私には世の中が變れば變る程、追憶を更に新にするものである。なぜなれば妻の性格が、私には昔の日本婦人の典型のやうに惚ぼるるからである。妻は生涯表面に立たず兀々と働き椽の下の力持ちで終つた。例を挙げれば子供の教育に就いて、自己の意見を差し挟まず、私の意見を尊重し全く私の

すのである。子供に対する遺言は五六回もあつた。察するに身体の調子が急に悪く、今に御淨土に参らんとする心の起つた時、急に『子供を招んで呉れ。子供に話がかたいたいから』と注文があつた。昼間はよいが、夜間子供が眠つてゐる時などは六才の末子がなかなか目を醒さず、遂には子供が泣き出して困つた事もあつた。子供が余程氣にかかると思へ、何度も何度も同じ遺言を繰り返すのである。

### 臨終

四月八日未明迄は四十度の高熱が続き、患者は非常に苦しんだが、八日朝急に熱が下り苦痛が去り、頗る機嫌がよかつた。然しそれは身体が極度に衰弱し、歌滞がひどく既に如何とも手当の施しやうなき危篤状態に陥つたのである。子供が買つて來たアイスクリームを非常に賞味し、家族に對しいろいろの話を為し、医師や看護婦にも御礼を云つてゐた。やがて午後になると、急に容態が悪化し苦痛を初めた。私はアイスクリームを食べるやう勧めた処、妻は『午前アイスクリームは妾の此世に於ける最後の食事であつた。もはやこれから何も頂けぬから妾の為今後食事の準備をせぬやうに』と答へた。心臓が次第に衰へ、何程強心剤を注射してもきかなくなり、話をしてゐる裡にもう脚の感覚がなくなつた、手も感覚を失つた、耳が聞こえなくなつた、眼が見えなくなつたと、臨終が刻々迫り來るの

異体同心者となつて、教育に専念した。この為嫉が自然硬くなり、子供には氣の毒であつたが、私自身妻に衷心感謝してゐる。私は妻を全く私の犠牲者として感激してゐるが妻は夢にも犠牲などとは考えず、自己の為すべき当然の事を、唯させて貰ふ仕合せを欲び誠心誠意努力した。粗衣粗食で一生懸命働き、他人の犠牲たる事に満足したのは実に信仰の賜である。食事の如きも私が外出し帰宅が遅れば子供には定時に食事を攝らせ、妻のみは私の帰りが如何に遅れても決して食事せずして待つてゐる。私は妻に『外出すればよんどころない用件が突発する事もあつて、外出者はあてにならないから定時に食事するやう』再三勧告するが妻は『外で働いてゐる人は大切なお仕事で苦勞されてゐるのであるから、宅に安閑としてゐる者は食事の遅るることぐらいでは勿体ない』と云つて、終生此主義を履行した。

斯の如き妻の性格、思想は、現在の世相と著しくかけ離れ現在では容れられないであらうが、私には実に感慨無量なものがある。発病から死に至る迄、医師看護婦を初め関係者隣人に至る迄、皆懇切丁寧な御世話下され、患者も此光景を見て其厚意を欲び洵に仕合せであつた。特に子供等が母の重態を覺り、母の看護、医師への走り使ひ、物品の調達等に涙ぐましく働き、妻は之を深く欲び、如何にも満足した様子が今尙眼前に髣髴としてゐる。苦痛のひどい病氣で



あつたが、患者は常に感謝の念に溢れ、病室は極めて平靜でなごやかであつた。此処にも妻の性格が窺はれ、自然に頭の下る思ひがする。

### 涅槃經四句の偈文

妻は九日間病苦と闘つて遂に斃れた。私は妻の逝つた日の朝、歎滞が著しく全く危篤に陥るまで妻の生命に対する希望を捨つる事が出来ず、心の奥底に萬一の期待を以つてゐた。然るに妻は發病当初から死ぬる事に一点の疑ひなく、死を明確に認識しながら信仰の力で能く病苦に堪へ、沈着冷静臨終意識ある最後の一瞬迄、母として又妻としての任務を完全に果し遂げ、歎び勇んで御淨土に参られ信仰の力の如何に偉大なるかを私に身を以つて示して呉れた。

之に就いて私の念頭に絶えず去来するものは、彼の涅槃經四句の偈文である。諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為樂、之を弘法大師はいろは歌として作られた。妻が生ひ立ち段々成長した、嫁になつた、母になつたと云つてゐる間に忽然死去した全く一瞬の夢である。唯に妻ばかりではない。天地間の萬物は皆悉く例外なく散つて亡くなつて仕舞ふ。諸行は無常である、『色は匂へど散りぬるを』である。私が頻死の妻に未練が残り、強く生きよ頑張れと無理難題を強ゆれば、妻は『今更私はどうにもならぬ、今の私には御慈悲以外に何も無い。又外に用事も無い』と落ちつ

## お 粥 の 念 佛

「お粥の念佛」といふことは、度々近角先生から承つた至言であり、年と共に私の心の底に徹して「アアさうだつた、お粥の念佛であつた、商無阿彌陀佛」と頂いて居ります。それにつけてもこの故実を想ふのであります。

或時明遍僧都が高野山で、法然上人の選撰集を読まれましたが、良書であるがすこし偏執があると思われ、そのまゝ寝につかれましたが、その夜に夢をみました。

その夢は、天王寺の西門に無数の病人がやみふせつてゐる。そこへ聖僧が現れて鉢に粥を入れて匙で病人に与えてゐられる。それがいかにも殊勝なので「誰人ぞ」と問はれると「法然上人也」とのこと、ハツと僧都は夢からさめられたのであります。

そこで僧都は深更我身を深く省みられて、法然上人は時代と根柢をよく知られた方である、胃腸をいためた重病人には柑子、橘、梨子、柿などは無用である、さう云う重患者にはお粥ばかりが生命をつなぐ綱である。静かに我身を内省すれば、何一つ徹底した行も出来ず、眞実の学も出来

き掛つてゐる、『わが世誰ぞ常ならむ』は是れ生滅の法である。妻は既に過去の思ひ出苦しかつた事樂しかつた事の総ての執着から抜け出て光風霽月の心境である、生滅々已即ち「有為の奥山今日越えて」である。妻は「予ての信仰が間にあつて今御淨土に参らせて頂くから歎んで呉れ」と勇躍歎喜してゐる。寂滅為樂即ち「浅き夢見し酔ひもせず」である。欣求淨土の相が顔に満ち溢れてゐる。信仰の力、御佛の御慈悲の何と偉大なることよ。遠い昔釈尊が雪山童子として此世に出現し、身を賭して求めた四句の偈文は妻が身を以つて私に体験させて呉れた生きた事実である。四句の偈文は妻の全生涯であり、亦私の生命である。

時は陽春、桜の花盛り爛熳たる花の下に妻は桜の如く散つて、御淨土に参られた。毎年桜花を見る度に、故人を憶ふの情彌々切なるものがある。

年毎にもの思はする桜花眺めて偲ぶ人はいつまで亡き人に曳れて迎る法の道彌陀の淨土に参る嬉しさ

昭和二十九年四月稿了

以上

## 聚 墨 生

てゐない自分も亦重病人である、法然上人の勧められるお粥の念佛より外にたすかる道のない者であつたと、深く懺悔せられて、ひとすぢに念佛申されるやうになりました。

それから後、僧都は上人をたづねられ「生死出づべき道は念佛の一行と思ひ定めて、日々念佛は申して居りますが妄念の雲が常に心の空を覆ふてゐて、晴々とした心で念佛が申されませんが、どうしたものでありませうか」と目頃の不審を申し出られますと「妄念ばかりは法然も力が及びませぬ。さういふ心をめでたくつくらうて申す念佛ではなく、さういふ私共なればこそその他力であり本願であります」と答へられると、僧都は感極つて涙を流して随喜せられたと伝へられて居ります。

星霜流れて七百余年、今や津々浦々に念佛は伝へられて居りますけれども、我見我執を根として謾否まぢまぢ、転変限りないことあります、結局は僧都の如く我身の重病を省み、念佛のお粥を頂くそこに凡夫救済の光が永遠に射し添ふのであります。



編集後記

戴いたものでもてなす山家哉  
といふ古い句がありますが、本月号  
は、すつかり戴きました原稿で、黄色  
黄光、白色白光、赤色赤光の信光に彩  
られました。有難いことであります。

四月の下旬、奈良市の竹田様から小  
包が送られ、開いて見ますと、池山先  
生の意訳歎異抄の点字訳の本がありま  
した。数年前、竹田様が半身不自由に  
なられて以来、一筋に道を求められ、  
歎異抄によつて彌陀佛の大悲に気づか  
れると、世間の不自由者のことを非常  
に同情せられ、一念ここに思ひ立たれ  
て点字を習得され、信仰書を盲人の方  
々に送つて居られたのであります。今  
回三月中旬から一月餘りかかれて意  
訳歎異抄の点字書を完成され、岡山長  
島愛生園の盲人の方々へ贈られるに  
いて、私が御縁が深いので「序文を書  
け」とのことで廻送せられたのであり  
ます。私は三拜九拜申しつつ、指端に  
触れる点字の感触にひたりながら、こ  
うして盲者の方々の中に佛の大悲がト  
クトクと注ぎこまれて行く、そこに盲  
人の方の心に永遠の黎明がひらける、  
その準備の完く成つた点字本を前に感  
涙にむせびました。そして謹んで愛生  
園のA君に発送いたしました。

又A君から折り返し感謝に満ちた書  
信があり、且つはA君が点字を学び始  
めたのもお慈悲に気づかれたのが根本  
でありますが、何度か初一念がくじけ  
かけやうとするたびに「譬へば大海の  
水を一人にて升量せんに」の法蔵菩薩  
の御苦勞を想ひ、極寒期に指頭の  
感覚が寒さに失はれつとも努め努めて  
遂に読み書きの自由を得られた苦勞の  
跡もつつましやかに記され、ひとへに  
お慈悲の加護の賜でありますと非常な  
感謝と喜びのあふれる心で結ばれてあ  
りました。

このことは怠慢な私に大きなおしへ  
を與へて下さつた出來事のままに有態  
に記しました

△「三誓偈講話」は福島先生が特に今  
回は身辺多事の間に筆記を補正して下  
さつたものであり、慈光誌を深く念じ  
て下さることを謝しまつる次第であり  
ます。東京都世田谷区世田谷町四丁目  
七二四番地が御住所です。

△「日出でて夜あく」の柳瀬留治氏の  
原稿は、ひとへに他力にして自力をは  
なれた、他力自然の妙味を鮮明にお知  
らせ下さいました。東京都澁谷区代々  
木町本町七三一に住まれ、短歌草原社  
を主宰せられて、個人歌集「霜髪」を廿  
七年に出版してゐられます。

△「亡き妻を懐ふ」の和才誠司翁の御記

録は歎異抄九章に血と肉をつけられた  
如きものであります。最近伝聞いたし  
ますと聖人の御旧蹟を四月初めにお訪  
ねになり、古稀の身の御礼とされまし  
た由であります。福岡市大坪町二の四  
八番地が御住所であります。

聚墨生

昭和二十九年六月十日印刷  
昭和二十九年六月十五日発行

毎月一回十五日発行

一部 十七円(郵税共)  
半年 百円(郵税共)  
一年分 二百円(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集兼 花田 正夫  
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一 道 会 館  
発行所 慈光社  
振替口座 名古屋一〇四七〇番